頂極歩刊

長井市立西根小学校
学校だより第18号
令和5年2月10日

「刻歩極頂」（こくほきょくちょう）　一歩一歩の歩みを大切に　頂上にたどり着く
長井市初代名誉市民　孫田　秀春　博士　揮毫

主体的に学ぶ子供の育成

西根小学校では、「主体的な学ぶ子供の育成～探究型学習を通した、学びを実感できる指導の工夫～」というテーマのもと、研究授業を行っています。教員にとって「研究授業」は、力量向上のため最も効果的な方法です。教員の世界では、従来から研究授業を大切にしてきました。

しかしながら、これからの予測できない変化に主体的に向き合い、よりよい社会の担い手や幸福な人生の創り手を育てたいと考えたとき、授業をするうえで「教え方」を工夫するだけでなく子供の「学び方」を育て、しっかり見取ることが大切です。「あの子はお友達とこういう学び合いをしていた」とか「あの子はお友達の考えを取り入れて深い学びをしていた」などと分析し、授業を改善していきます。

西根小学校の先生方は、職員同士、学び合い、高め合い、支え合う、そんな雰囲気があり、授業研究会にはとても熱心です。子供たちも生き生きと学び、学びを深め、参観された先生方（大学の先生、市教委の指導主事等）から多くのお褒めの言葉をいただきました。

令和５年度も、西根小学校は研究授業を積み上げ、１１月に学校研究発表会（先生方の研修会）で成果を発表する予定です。（写真は、今年度の担任の先生方の国語の研究授業です。）

１　年

２　年

３　年

４　年

５　年

６　年

【ご協力ありがとうございました】

児童会運営委員会の呼びかけで集めた「赤十字募金」が１０，９１４円になり、２月９日（木）の集会で、長井市福祉あんしん課の課長様に贈呈しました。児童のみなさん、保護者の皆様、ご協力いただき、ありがとうございました。

（令和４年度「ボランティア体験作文」小学生の部　入選）

ボランティア活動

５年

私は、夏休みにボランティア活動をしたいと思いお母さんと一緒に探していたら、使用ずみ切手収集というのを見つけやってみたいと思い、集め始めました。調べてみるとただきれいに切手を切り取ればいいわけではありません。消印の所まできれいに切り取らなければいけません。

なぜ使用ずみ切手がボランティアになるのか分かりませんでした。そこでお母さんと一緒に切手を持って長井市社会福祉協議会ボランティアセンターという所に行きました。ここは、除雪や災害ボランティアなどもしている所だという事を初めて知りました。

そこで、切手を回収してくれた事むの人にいろんな事を教えてもらいました。

使用ずみ切手は１キログラム１５００円ぐらいでコレクターの人が買いとるのだそうです。そして、

「そのお金は、いろんな人を通じてワクチンとなりワクチンを待っている世界中の子供達の元へ届けられるんだよ。」

と教えてもらいました。切手１キロ分集めるには一体何まい集めればいいのでしょう。試しに１まい計ってみたら約１グラムでした。１グラムにならない物もあったので、１キロ分だと千まい以上集めなければいけません。

私が持っていた切手は４まいだけでした。たった４まいでも

「わざわざ持ってきてくれてありがとうね。」

と言ってもらえてすごくうれしかったです。帰ってから家族のみんなや親せきのおじさんに協力してもらって１５まいぐらい集まりました。それでもまだまだ足りません。

夏休み中は少ししか集められなかったけれど、この活動を続けていきたいしみんなにも知ってもらいたいと思いました。小さな事でも積み重ねられていけばたくさんの人の力になれるんだと思いました。初めてのボランティア活動で私は、少しみんなの役に立ててうれしかったです。

また今度、私でもできそうなボランティアがあったら、積極的に参加してみたいです。

＜ミニコラム＞　子供の心とことばを育てるために（その９）

失敗と愛嬌を教える

パナソニックを一代で築き上げた故・松下幸之助さんが、人を評価するときに最も重視していたのは「愛嬌があるかどうか」だったそうです。愛嬌がある人は、人に好かれます。自分の弱い部分を素直にさらけ出しているため、誠実さが伝わり人に愛されるのです。

愛嬌のある人に育てることは、その子の人生のためになると私は思っています。失敗しても周りから「なんだかかわいいな」と容認される人であれば、周りに愛され、その先も自信を持って生きていけます。

そのためには、まず「人は失敗するんだよ」ということを親が進んで見せてあげることは必要なのです。そして、失敗を自分の気づきにし、それを生かして、さて、今度はどうしようかなと考えて行動していく。親自身が「失敗しても次につなげられるんだ」という気持ちで、失敗を楽しんでみてください。そうした姿勢は子供にも伝わり、少しずつ愛嬌が身についていきます。

『わが子が「学校に行きたくない」と言ったら』（大久保俊輝著、モラロジー道徳教育財団）より

私（校長）は以前、特別支援学校に勤務していたとき、全く同じ思いをもち、「人にめんごがられる子」を育てたいなあといつも思っていました。さらに「素直さ」がある子は、学習や作業の習得も早かったと思います。また、小学校の特別支援学級に在籍する子で、その小学校でいちばん低学年の面倒見がいいという女の子にも出会ったことがあります。その子たちに共通するのは、やはり「愛嬌」のある子だということ。・・・いや、大人だってそうかもしれません。変に理屈っぽい人より、愛嬌のある朗らかな人の方が安心してそばにいられますね。